

構図的には番狂わせに違いない。新人候補同士の対決で27日に投開票された川崎市長選で自民、民主、公明3党の相乗り推薦候補だった元総務官僚が無党派をアピールする元神奈川県議に敗北を喫した。

同日投開票された神戸市長選でもやはり3党相乗りの元総務官僚が次点候補に追い詰められて辛勝した。政党の足元の不安さを反映するような結果だ。国政で「1強」が際立つ中だけに、とりわけ自民党はこのシグナルを重く受け止めるべきだ。

2政令市長選は新人対決で、いずれも元総務官僚が前職の路線を受け継ぐ形で自民公3党の推薦を受けて擁立された。これに2度目の挑戦となる無所属の新人候補が接戦を演じるという似た構図となった。

川崎は「完全無所属」を掲げる元県議、福田紀彦氏（41）が約2900票差で接戦を制した。一方、神戸は元総務官僚で副市長を経て出馬した久元喜造氏（59）が約5700票差の僅差でかろうじて当選した。

川崎で当選した福田氏は「自公民は連合艦隊で、私は手こぎボート。奇跡だ」と語る。川崎の投票率は32.82%、神戸は36.55%と4割を切り、通常は厚い組織に支えられた相乗り候補に有利だ。それでも敗北や苦戦を強いられたのは無党派層の支持が得られず、組織票が有効に機能しなかったためだろう。

川崎は42年間官僚や市OBに市長職が占められ、神戸は助役（現副市長）からの転身組の市長が64年間も続く。分権改革で政令市の役割が増している中、政党のご都合主義による旧態依然たる候補者選びと住民の目に映った可能性がある。

国政選挙で圧勝を続けた自民党だが、首長選挙では必ずしも順風が反映されない傾向がある。確かに各種世論調査で自民党の支持率は野党を大きく引き離している。ただ、昨年の衆院選、今夏の参院選といずれも低投票率に沈む中での圧勝だった。

自民党への追い風なのか、野党への逆風なのか絶えず足元を見直し謙虚に政権運営にのぞむ必要があるはずだ。だが、消費増税の使途の説明不足や特定秘密保護法案への対応など危うさをのぞかせている。

自公両党と相乗りし存在感を発揮できなかった民主党はより深刻だ。国政の「自民1強」は政党全体が沈みかねない状況と紙一重だという責任感が乏しすぎるのではないか。

両市長選について自民党の石破茂幹事長は「(国政選挙勝利で) どこか、おごりや緩みをわが党が持っていたのではないかと述べ、検証を進める考えを示した。臨時国会はねじれ状態を解消した与党の節度が試される場でもある。地方選の結果と軽く見ず、頂門の一針とすべきだ。